

和歌山市・紀の川市地域公共交通活性化・再生総合事業

事業期間
20～22年度

廃線の危機を乗り越え、再生に向かっている貴志川線においては、地元自治体、商工会、学校、そして住民団体と事業者との相互協力により様々な取り組みを行っているが、今後の少子化の進行や沿線道路の整備という逆風に立ち向かうため、地域とのより密接な連携による持続可能な発展のための更なる活性化と増収策を協議し、これを実現することを目的とする。

【和歌山電鐵貴志川線・地域公共交通活性化再生協議会】

和歌山県・和歌山市・紀の川市・和歌山県立和歌山東高等学校・和歌山県立貴志川高等学校・和歌山商工会議所・貴志川町商工会・貴志川線の未来をつくる会・和歌山の交通まちづくりを進める会(わかやま小町)・和歌山市民アクティブネットワーク・和歌山電鐵株式会社

事業の概要(21年度)

①パークアンドライド用駐車場の整備 (15,480千円)

未舗装だった駐車場をアスファルト舗装し、利用しやすい駐車場に整備された。(月極め契約数7件増、一時利用も約10%増、バス用2台確保)



②サイクルアンドライド用駐輪場の整備(3,299千円)

伊太祈曽・竈山は飽和状態にあり、田中口は全く未整備状態で、遊休地を使用し整備した。(利用者が約9割の利用率)



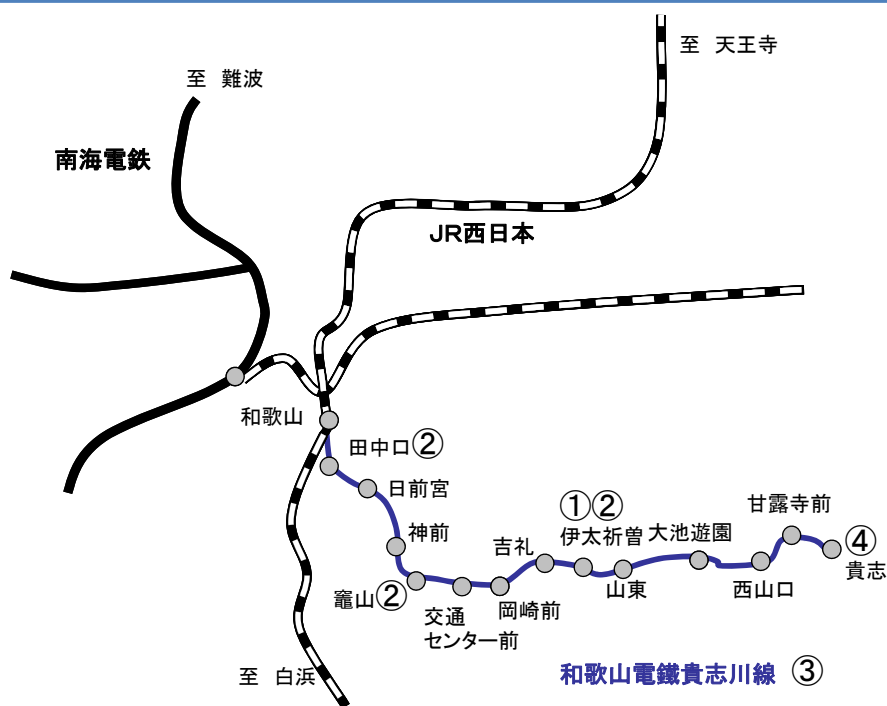
(伊太祈曽)



(田中口)



(竈山)



③シンボル車両運行情報提供システムの提供(3,500千円)

シンボル車両を目的に訪れる者が多く、時刻表では分かりづらいため、携帯電話からQRコード接続・パソコン検索の提供

和歌山行	伊太祈曽行
4 22/56	伊太祈曽行
5 26/56	新色はいらー電車
6 30	新色はたま電車
7 03/37	新色はあむちゅ電車
8 11/44	
9 17/49	
10 20/50	
11 26/56	
12 29/56	
13 21/51	
14 14/48	
15 08/41	
16 21/54	
17 26/56	
18 29/56	
19 21/54	
20 26/56	
21 29/56	
22 21/54	
23 26/56	
24 29/56	



④駅待合施設の整備(貴志駅)(60,005千円)

“木の国”和歌山にふさわしく地元のシンボルとなる檜皮葺(ひわだぶき)の駅舎として建替え、待合室の整備と、水洗化・男女別のトイレを整備した。



21年度 導入 への プロセス

沿線の定期的な利用者へのサービス向上のため、既存駐車場・駐輪場が未舗装又は飽和状態になっている駅を対象に整備・改善を図った。

地域のシンボル車両を目的に訪れる利用者のために、携帯番号からQRコードへの接続、パソコンで検索出来る時刻検索システムの情報提供を確立をした。

貴志駅待合施設の整備において、地元のシンボルとして(日本古来の伝統工法による)地元で唯一の材料で屋根を「檜皮葺」を採用し世界で唯一の駅舎として建替えて全国に広めた。

協議会の取組の他に、電鐵との連携による地域独自に取組み複合的に行った。駅のペンキ塗り大会(住人団体)、「世界民族祭」プレイベント(地元学校)、漫才電車(地元漫才コンビ)など他多数。

21年度 事業の 効果

伊太祁曽駅前駐車場は、未舗装で雨後長時間に渡るぬかるみの発生等で女性には敬遠されていた。また、週末や行楽シーズンは飽和状態であったが、アスファルト舗装整備によって利用者から好評を得る。(50台→66台)

潜在需要の掘り起こし

伊太祁曽・竈山は市営駐輪場が飽和状態、田中口は未整備であった。遊休地を利用し舗装整備され収容台数を十分に確保され約9割の利用率で潜在需要の喚起と利便性向上により利用者が定着し貢献した。

利便性の向上

「いちご電車」等のシンボル車両を目的に訪れる利用者が多いが、運行時刻について変動するため利用者に不憫をかけていた。解消するために携帯電話からQRコードやパソコンから検索出来る情報システムを整備し、利用者から好評を得て利用促進に繋がった。「時刻表サイトの閲覧数は前年同期比約3割程度アップ」

観光利用の促進

貴志駅の駅長「たま」や「イチゴ狩り」等を目当てに訪れる方々が多いが、休憩スペースが狭小、トイレも非水洗・男女共用であり、地域の魅力に触れる機会も皆無に等しかった。木の国和歌山にふさわしく地元のシンボルとなる(「檜皮葺」: 檜の皮で作った板を屋根に積み重ねる日本古来の伝統工法で高い技法)を採用し世界に唯一の駅舎として整備されこれからの活性化に大きく貢献された。

次年度以 降

地域との連携をより一層密にして本格実施に向けて取組んで活性化を図っていく

話題となる貴志駅が地元のシンボルとして全国から注目が注がれ新たな利用者の掘り起こしに大きな期待がもて利用促進に繋がる。

引き続き地域住民との対話、協働をより一層の強化を図り連携して取り組まなければならない。また、これまで以上に利用者の視点で努めていかななければならない。

21年度は1000円高速やインフルエンザの流行のおり、利用者は217万人と対前年比0.9%減であったが、定期外利用者数では、シンボル車両等、システム情報整備など図り一定の歯止めが留まった。

しかし、高速無料実証試験がスタートすることで益々、マイカー利用が増え公共交通機関が一層厳しい状況に立たされることとなる。